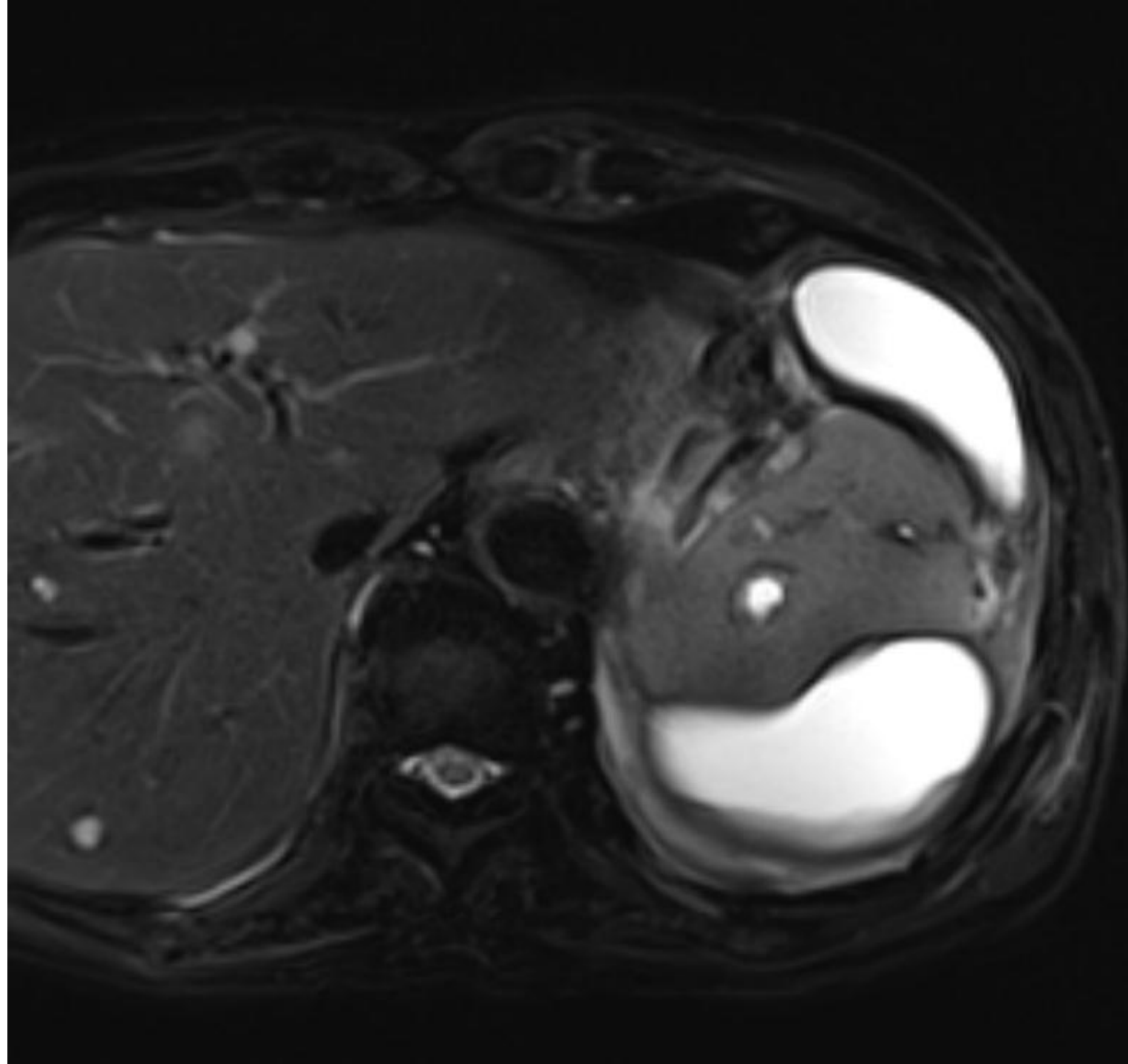
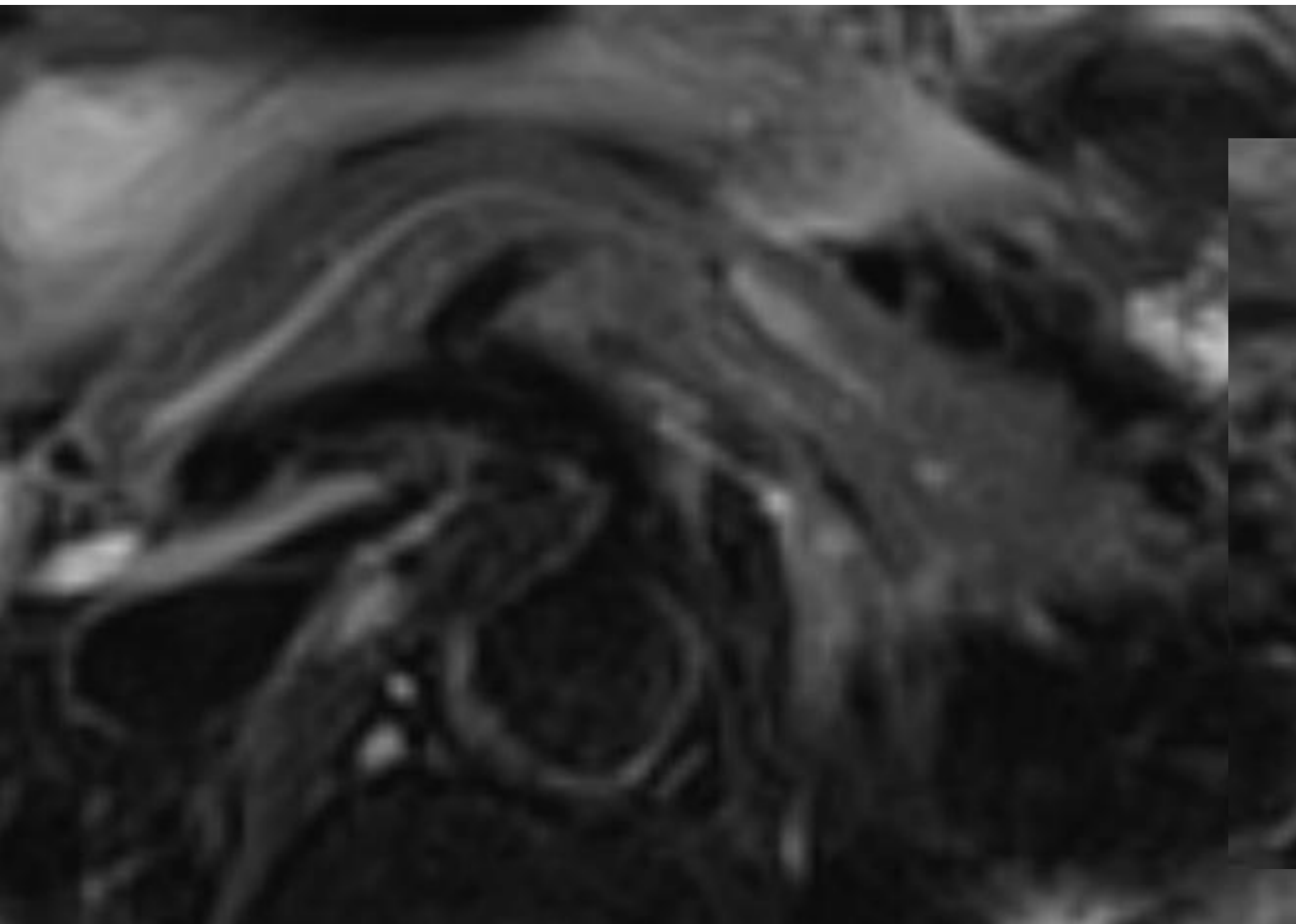


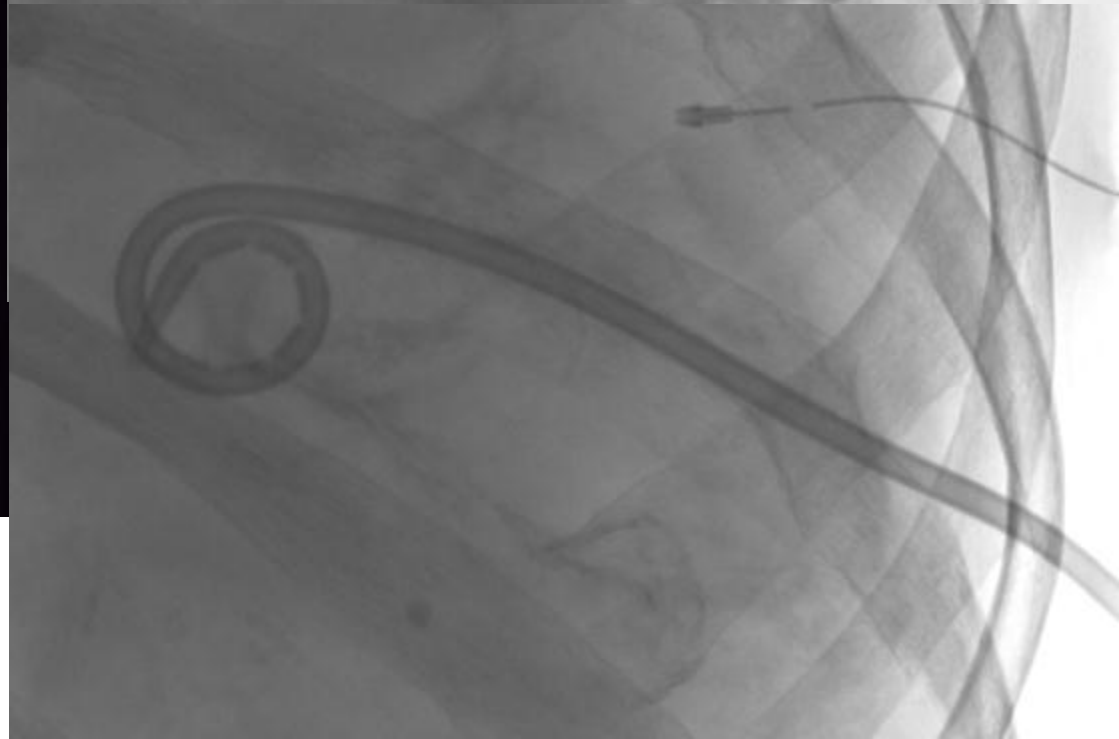
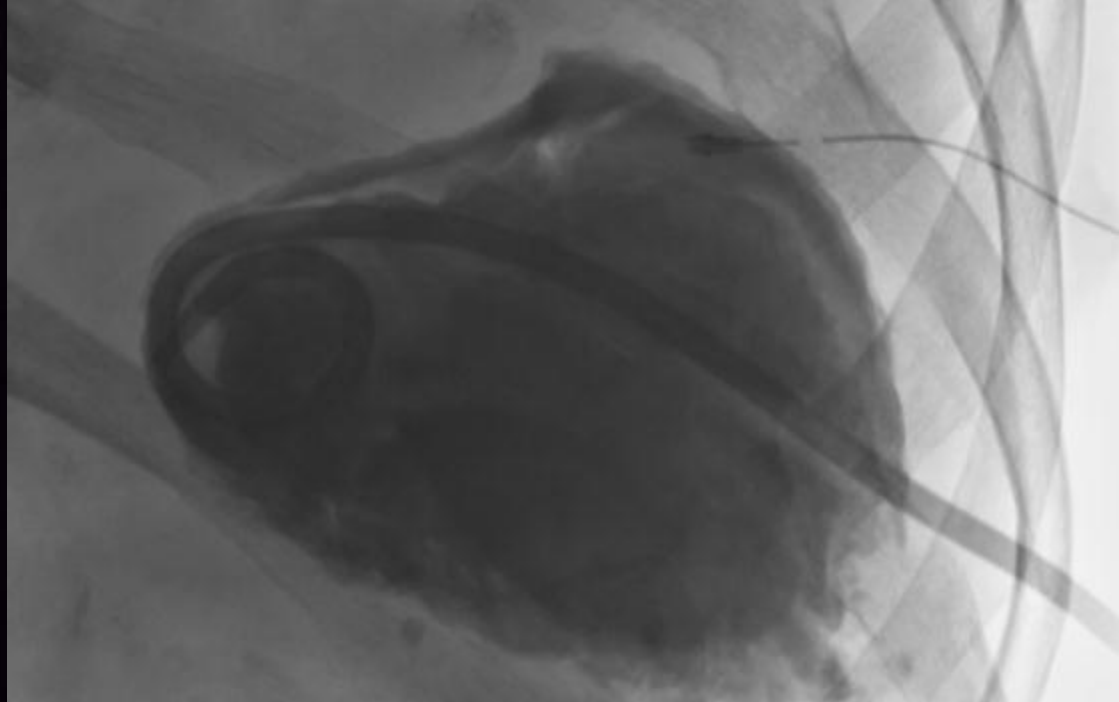
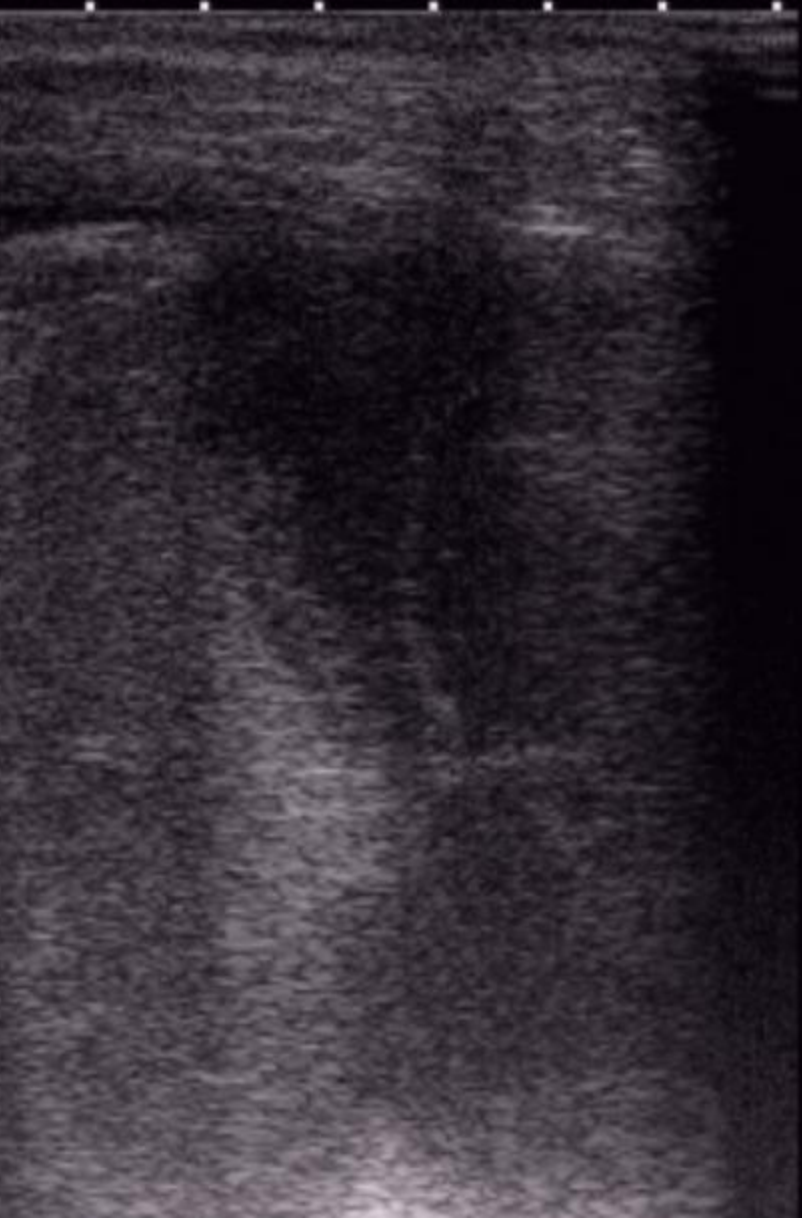
74M

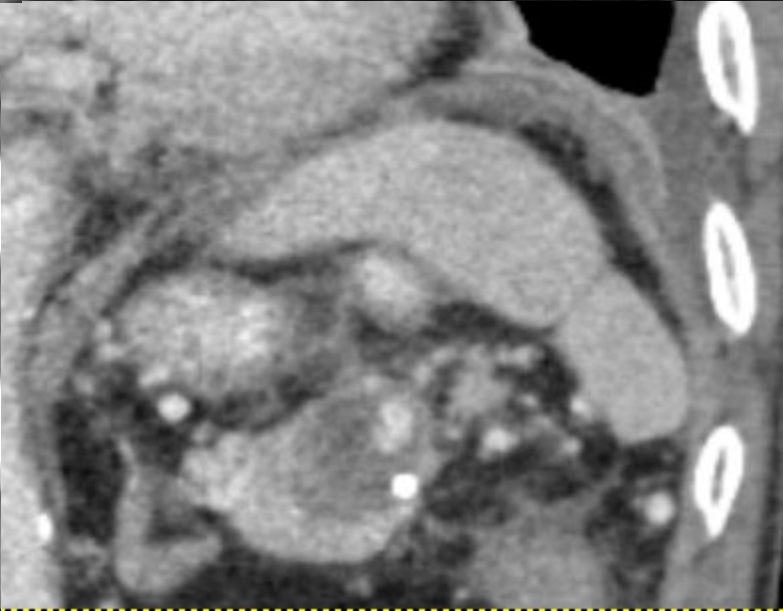
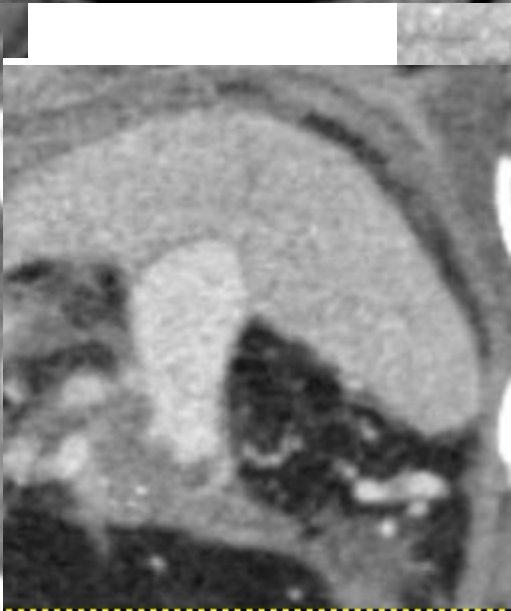
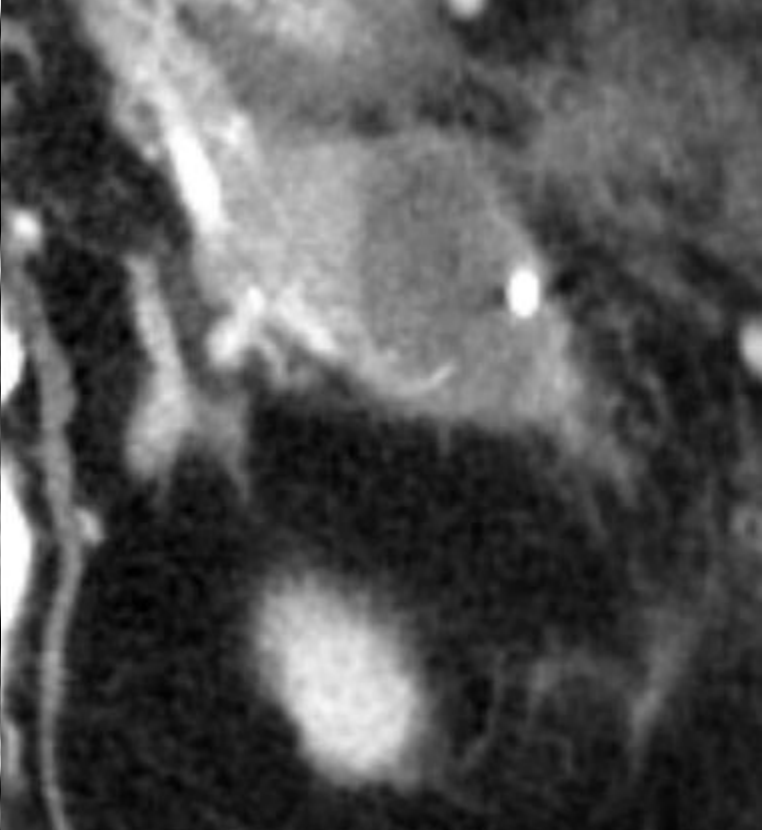
脾周囲嚢胞の触れ込みで紹介
膵炎後仮性嚢胞
脾動脈瘤

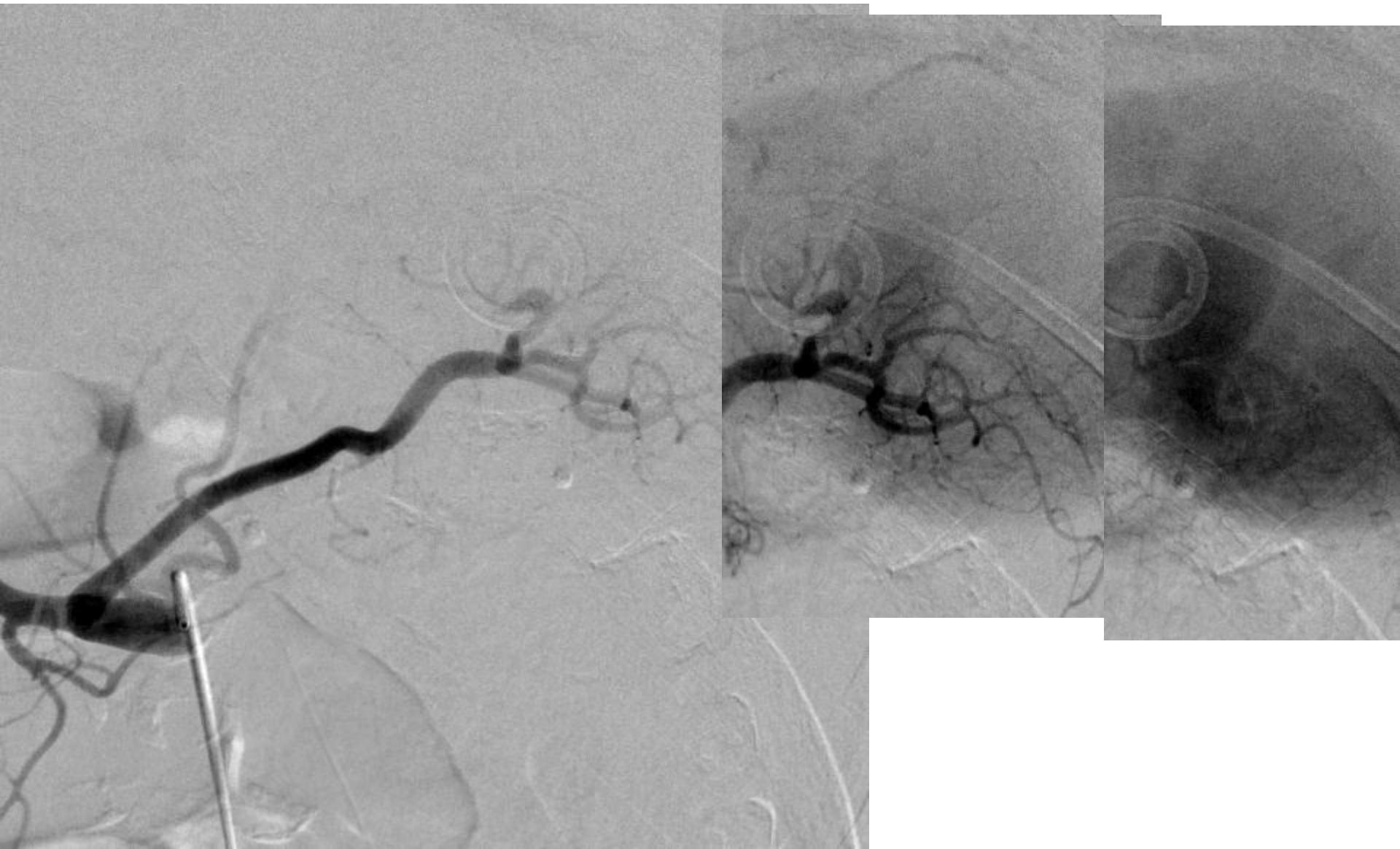




膵体部主膵管内の膵石疑い。
脾周囲の広範な仮性嚢胞。

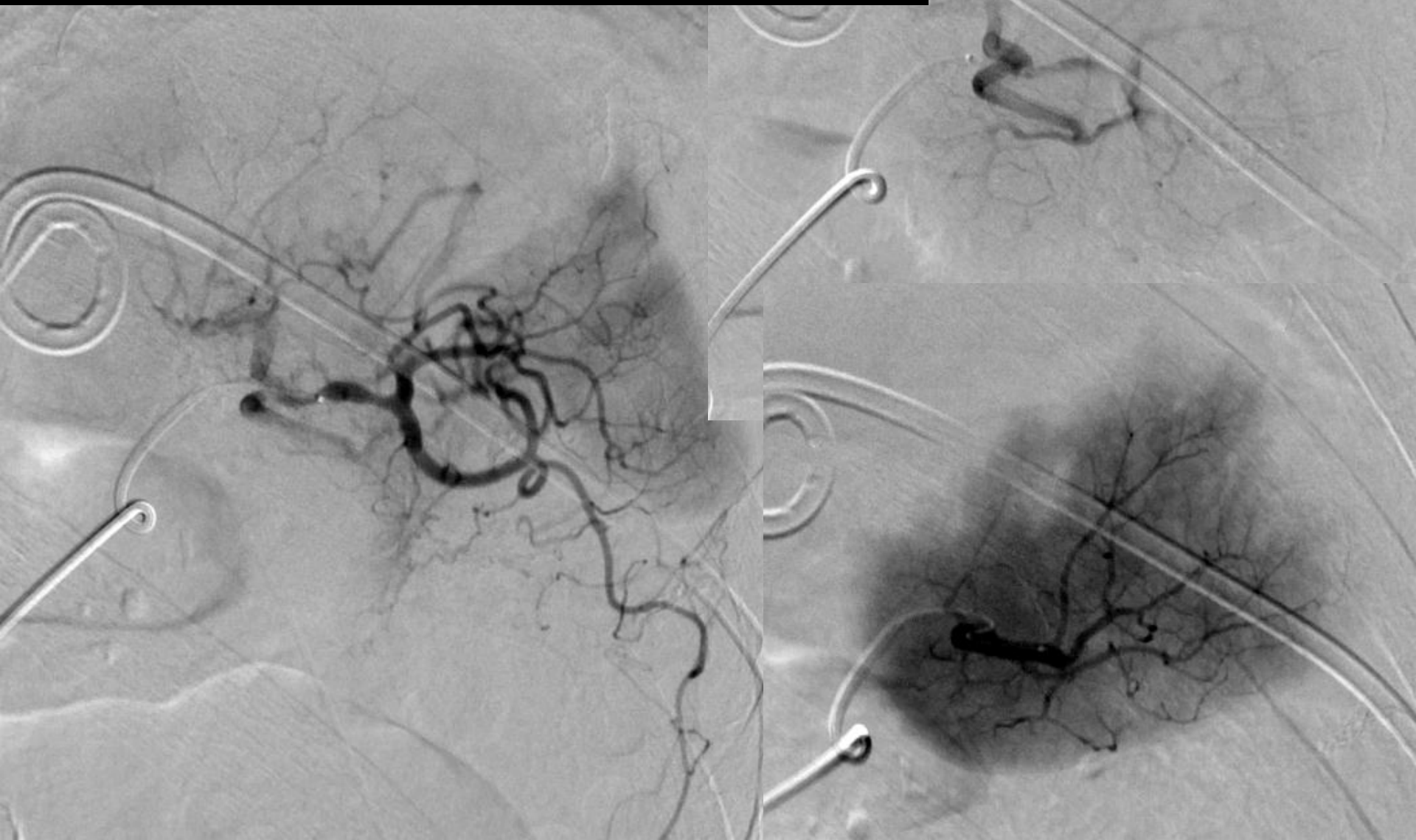






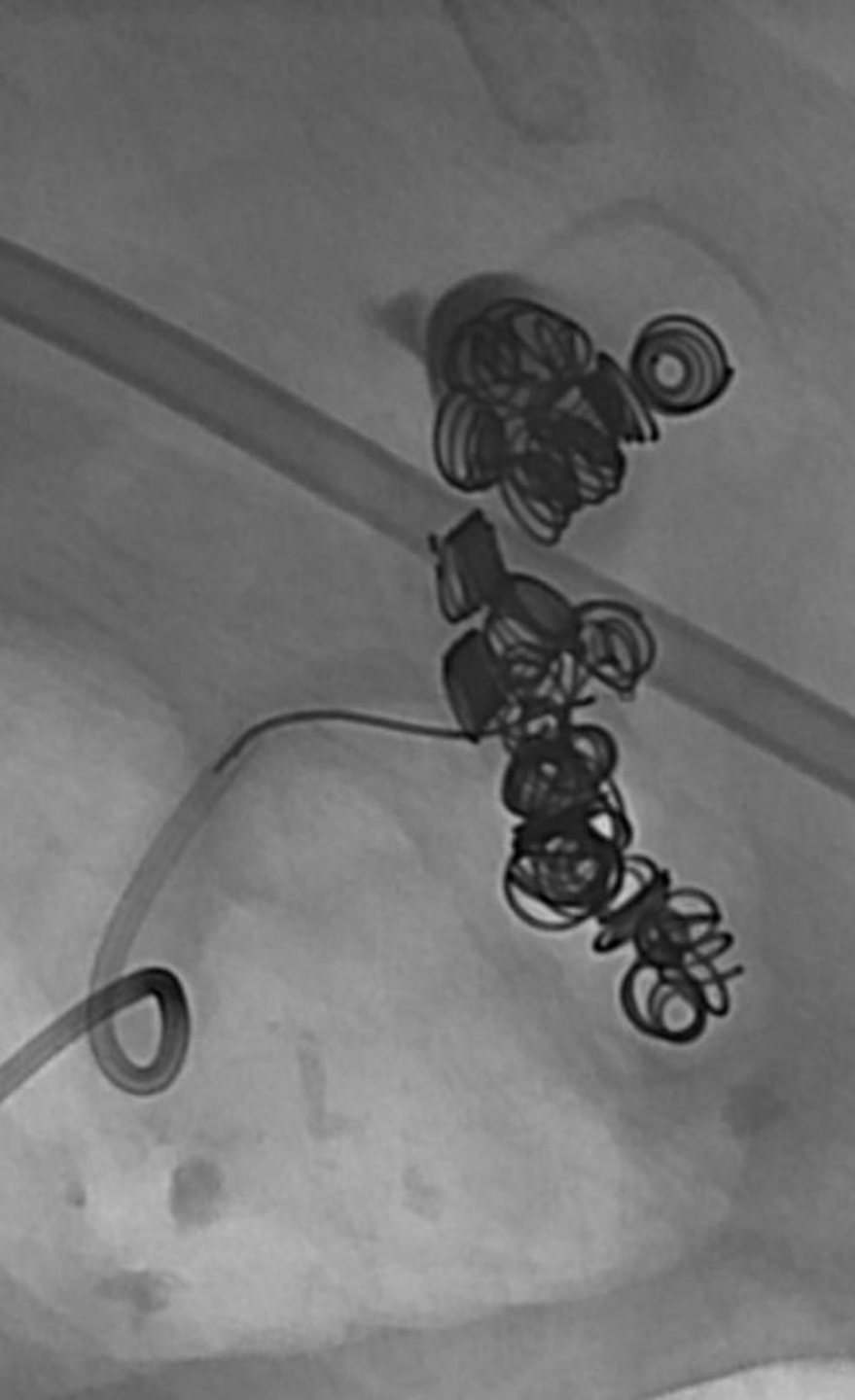
瘤内への血流は遅く動脈相後期から静脈相にかけてゆっくり描出されてくる

4Frシモンズタイプのカテーテル先端を切断、RIMの様にし、ラジフォーカスガイドワイヤーを用い脾門部まで誘導。回転撮影を行って動脈瘤の開存部位を探すがはっきりせず。マイクロカテーテルシステムにて脾臓前極、下極の枝を選び造影を行うも動脈瘤は描出されず。





マイクロガイドワイヤーが瘤内に迷入。
そのまま親カテーテルを追従させようとするも入らず。
造影をしながらマイクロカテーテルを引き抜き、
再度0.035インチ ラジフォーカスガイドワイヤーを挿入し、
親カテを挿入しようとするもラジフォーカスガイドワイヤーは入らず。
再度マイクロカテーテルシステムを挿入。



6mm径*20cm長のIDCコイルを挿入するも途中でロッキングし回収、更にもう1本挿入するもやはりロッキングして回収。

カテーテルの位置を手前に引き抜き、動脈瘤基底部に先端をおいて再度挿入するもやはりロッキングにて入らず。

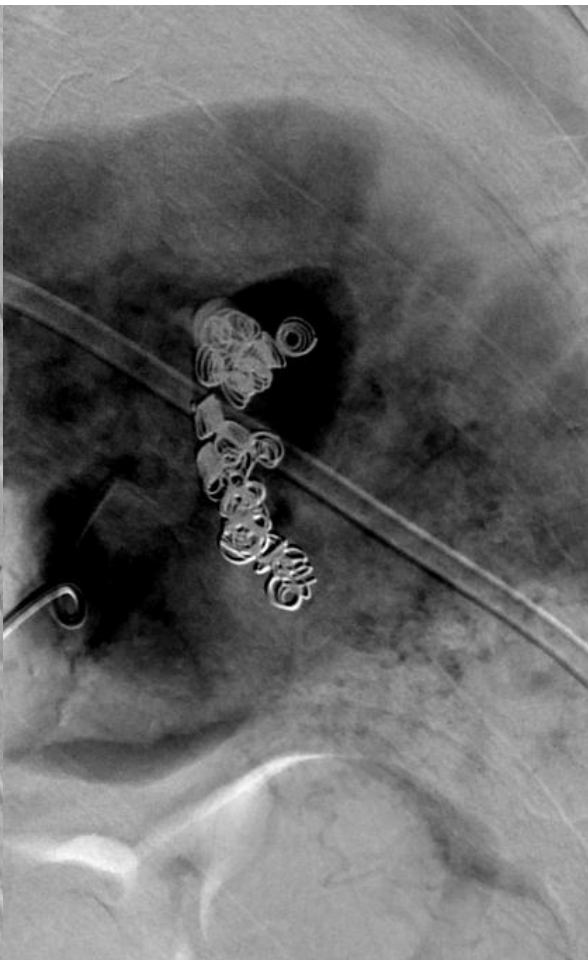
4mm径*8cm長のIDCコイルは容易に通過。

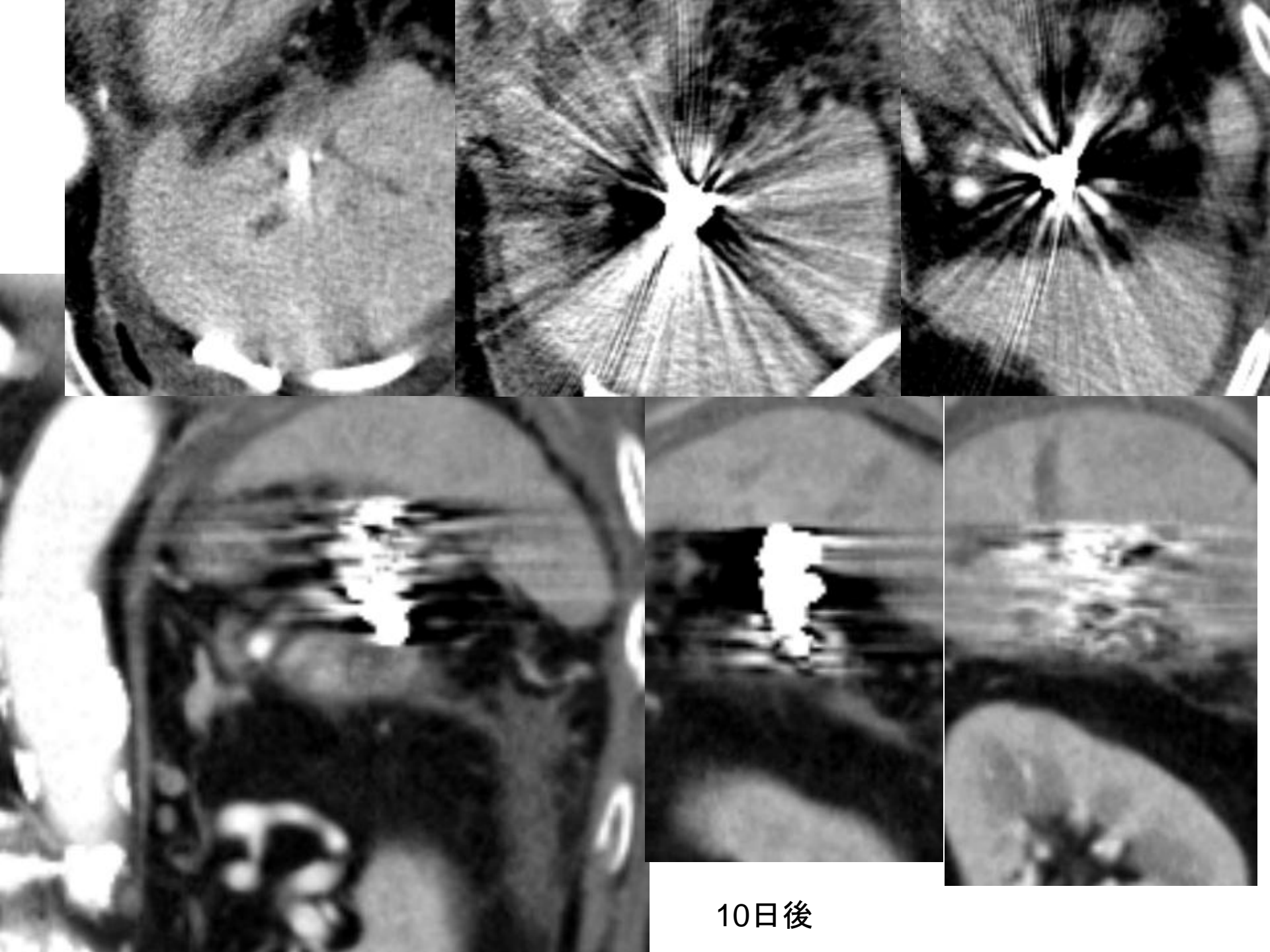
2mm*5mmトルネードコイル	4本
2mm*4mm径トルネードコイル	5本
4mm径*8cm長IDCコイル	3本
2mm*3mmトルネードコイル	2本
2mm*5mmボルテックスコイル	10本
2mm*4mmボルテックスコイル	2本

その段階で瘤内のボリュームとしては1/3程度がコイルに入れ替わっており、これ以上のコイルによる塞栓は断念し、

瘤のオリフィスに対し

2mm*3mmトルネードコイルを留置





10日後